



マスター ↑↓to アーティスト



【第12回】

< 旅と痛み >

吉川正道 美術学部 工芸領域
陶芸コース 教授

(よしかわ まさみち)

- 1946年 神奈川県生まれ
- 1968年 日本デザイナー学院研究科卒 常滑陶房杉入社
- 1971年 朝日陶芸展 優秀賞
- 1972年 ヴァロリス国際陶芸ビエンナーレ国際大賞
- 1981年 朝日陶芸展 大賞
- 1983年 第一回朝日現代クラフト展 グランプリ
- 1984年 IAC会員 (国際陶芸学会・スイス)
- 1985年 民族芸術学会会員
- 1992年 ニヨン・ボースリントリエンナーレ2常受賞
- 1998年 ミュンヘン国際アート&クラフト展 ゴールドメダル受賞
- 1999年 札幌芸術の森クラフトコンクール 優秀賞
- 2000年 第3回出石磁器トリエンナーレ グランプリ
- 2001年 第1回韓国国際陶芸ビエンナーレ 銅賞
- 2002年 第18回ヴァロリス国際陶芸ビエンナーレ 金賞
- 2003年 第2回韓国国際陶芸ビエンナーレ 審査員 乾由明賞
- 2004年 第1回台湾国際陶芸ビエンナーレ グランプリ
- 2006年 愛知県芸術文化選奨 文化選奨受賞
- 2007年 ロイヤル・カレッジオブアーツ 特別客員教授に招聘
- 2009年 マレーシア・マラ工科大学客員教授就任

西キャンパスA棟、1階の研究室隣にある簡易接客室にお邪魔した。そこで使われている、モダンでシャープな意匠の湯呑み。揃いの器には季節の蜜柑がおもむろに盛られていた。

「庄司さん(庄司達教授)に、お茶会をやるんで茶器を造ってと言われて、造った時に残った物ですよ。焼き物はどうしてもリスクがあって、必要な数の倍ぐらい造るんです。」

若くして才能が認められ、20代の頃から大きな賞を総ナメと言っ

ていい程獲得してきた。実用の器にも、巨大なモニュメントにも、軽やかさ、土の重量感、洗練された造形・・・様々な要素を見る者に感じさせる。

「常滑に来たのは、卒業して間もなくですよ。」

イサムノグチが大きな脚光を浴びた潮流激しき時代。柳宗悦、白樺、民藝運動とファインアート・・・。「役者が揃っていたね」と述懐する。そのうねりの中へ飛び込んでいった。

デザイナーになろうとインテリ

アディレクションを学ぶ学科にいた氏は、卒業制作で、テーブルウェアのフルセットデザインをし、それを実際に焼き物で制作した。

「陶芸とか、ガラスとか、木工とか、石、金属そういう素材を扱う現場で修行したいと思って、まずは職人さんや実際に仕事に従事している人たちの中に入って、どういう風に仕事が出来上がってくるのか知るために常滑に入ったんです。素材の現場確認ですよ。」

卒業後、陶芸家杉江淳平氏の『陶房杉』の設立にスタッフとして参加し、その後独立。現在自工房を

個展「陶思考」



a

『The water of life-渚-』



b

昨年、4月～11月まで、宮城県栗原市の風の沢ギャラリーで行われた個展「陶思考」。古い農家と広大な里山を背景とした風の沢ギャラリー、そのこけら落としとして開催された。山中遊晶氏による能とのコラボレーションなど、期間中は多くのイベントも開催された。



風の沢ギャラリー
(<http://www.kazenosawa.jp/>)



c

中部国際空港、旅客ターミナルビル1階団体待合ロビー 幅27m、高さ2.8mもの巨大な陶壁作品。手前には、馴染み深い丸い陶のオブジェも並ぶ。広々とした開放的な空間をさわやかな青白磁が彩る。



d



「a, b, c, dは現代いけばな作家・松田隆作氏とのコラボレーション作品」

構える。「ヨゼフ・ボイスの『人間は誰もが芸術家であり・・・』とあるじゃない。簡単に言えば労働者も、どんな仕事をする人もみんな、アーティストなんだ、って本当に同感ですね。」

美術、デザインを学ぶ学生たちは、気持ちの上で準備ができていない人が多い、と言う。「自分が疑問に思ったことをちゃんと確かめに行かない、その現場に行っていない。」そんな学生たちに、優しくも厳しく「行ってこい、見てこい」と繰り返し語りかける。

「逃げないで、一生懸命作ればいいんですよ。卑下する必要もないし、イーブンで、自分の尺度でやればいい。何もわからない世界へ飛び込んで、一から学ぶわけですから、誰でも痛い思いはします。失敗しても、それこそが大事な経験なんです。まずは、自分のダメなところ、弱点をさらけ出さなきゃ。そここそがその人の才能なんです。そうやって一人前の表現者、クリエイターになってもらいたいと思っています。学業だけで終わらせず、プロとして生きて行ける道を開いてほしいんです。私はね、その手助

けをしたいんですよ。」

体を使って覚えたこと、現場を見る素直な姿勢は、現在も変わりなく貫かれている。繊細さと力強さが共存する作品の佇まいに大いに納得した。

「自分の疑問の答えを探す、それが旅に出ることですよ。憧れましたねえ、旅に」

豪胆に笑う姿から、土の匂いがした。